はじめに

本書は、ペテルブルクの場末コロムナを舞台にした物語を取りあげ、いわゆるロシア・モダン・クラシックの前史を飾る、一八三〇～四〇年代の都市文学にペテルブルク神話の光をあてたものである。

*

ロシア近代文学の揺籃の地サンクト・ペテルブルク（以下ペテルブルクと略記）を舞台にした十九世紀の古典、いわゆるモダン・クラシックの物語を読んでいると、しばしばコロムナという地名に目がとまる。たとえばプーシキンの『青銅の騎士』やゴーゴリの『肖像画』、ドストエフスキーの『永遠の良人』などがすぐに思い浮かぶ。また、コロムナと明記されていなくとも、ゴーゴリの『ネフスキー大通り』『鼻』『外套』や、ドストエフスキーの『貧しき人々』『家主の妻』『白夜』そして『罪と罰』などのように、通り、橋、運河や川、広場などの名称か

らコロムナと特定できる場所を描いた作品も少なくない。

あまり耳慣れないこの地名は市内南西部の歴史地区の名称である。今あげた作品の邦訳書には、ペテルブルクの「町外れ」とか「下町」あるいは「場末、貧民窟」などと注記されているものもある。どれほど侘しい場所かというと、たとえばゴーゴリは『肖像画』（初版）で、悪魔が乗りうつった高利貸しペトロミハリの住まいをコロムナの「山羊の沼（コーズイエ・バロータ）」（現クリビン広場）界隈としているが、V・クレストフスキー『ペテルブルクのスラム街（トゥルショーバ）』（一八六四）によるとその辺りは「梟が塒にするような」（第六章「淪落の人々」）場末であったという。

十九世紀前半にペテルブルクで次々と誕生した都市文学の傑作に、石造宮殿建築が立ち並ぶ華やいだ都心ではなく、むしろ侘しい町外れや貧民窟がとりあげられているのは、大都市の生活風俗を描写した、フェリエトンといわれるフランス由来の都市ルポルタージュの影響を思い起こせば当然のことなのかもしれない。けれどもスモーリヌィ、アプチェカーリスキー島、カルポーフカ界隈など数ある場末の中で、なぜコロムナばかりが繰り返し物語に取りあげられているのだろう。物語に占める場所の重要性を思うと、コロムナには他の町外れや場末とは異なる、何か特別な土地柄があったのではないか、そう思いたくなるのは道理だろう。

本書の執筆動機は、たとえばN・アンツィーフェロフ（「ペテルブルクの事実と神話」）などによってペテルブルクの神話とされているプーシキンの物語詩『青銅の騎士』の主人公エヴゲーニィがコロムナの住人なのは、コロムナの土地柄とペテルブルク神話のあいだに何か特別な関係があるからではないか、というきわめて凡庸な疑問に端を発している。

そもそも十八世紀に建造された人工都市に神話などあるのだろうか。

一八四〇年代に人々の口の端にのぼるようになったペテルブルクの神話は、ピョートル・チャアダーエフの論文『哲学書簡』（一八三六）を事の発端にしている。チャアダーエフはその論文で、ヨーロッパでもアジアでも

ないロシアが人類の進歩に何ら寄与してこなかったのは、ビザンチンからギリシア正教を受容したためだと断言したので、時の皇帝ニコライ一世から狂人の宣告を受けたのだった。これを期に思想界は二分する。カトリックに宗旨替えしたチャアダーエフに賛同し、ロシアは先進的な西欧文明を継承すべきだとする西欧派と、ロシア文化の優位性を主張するスラヴ派に分かれてロシアの行く末をめぐる侃々諤々の議論が展開されたのであった。

両派は文化、歴史、政治などあらゆる分野で持論を繰り返したが、西欧近代都市ペテルブルクも古都モスクワに「拮抗する原理」（アクサーコフ）として論点のひとつとなり、ベリンスキーの『ペテルブルクとモスクワ』（一八四五）やゲルツェンの『モスクワとペテルブルク』（一八四三）などの都市文明論が次々と書かれた。西欧かそれともロシアか、西か東かという議論の中で十八世紀初頭に沼地で産声を上げた、「歴史のない」（ゲルツェン）人工都市ペテルブルクは、毎年の洪水や、膾炙していた伝説「消えゆく都市」を背景に神話化され、ペテルブルクは幻想都市として一人歩きしはじめたのである。

「消えゆく都市」には、たとえばリムスキー＝コルサコフのオペラ『見えざる街キーテジと聖女フェヴローニヤの物語』で知られる、湖底に消えた十三世紀の理想郷「キーテジ」があるが、問題の湖スヴェトロヤールに強い関心を示した作家は、たとえばナロードニキの作家コロレンコや象徴派の詩人D・メレシコフスキーなど跡を絶たなかった（中村喜和『聖なるロシアを求めて』）。

思想界と伝説にいわばお墨付きをもらったペテルブルク神話は、文学にも定着し、ロシア文学は、幻覚、奇譚、恐怖など幻想都市の豊かなトポスを今も蓄積し続けている。それらゴシック・ロマン風のミステリアスな都市文学を、素直に愉しむに如くはないのだが、なんとなくもやもや感が拭いきれない向きもおられるかもしれない。

文学のペテルブルクが幻想や地霊や奇譚を纏うのは、しかるべき理由が、つまり神話を保証する歴としたテクストがあるのではないか。もしかしたら、ペテルブルク神話の文学的原点とされる『青銅の騎士』の主人公がコロムナの住人であることに何かヒントがあるのかもしれない。鼻を失ったり、外套を盗まれたりするゴーゴリの

主人公たちもコロムナに住んでいるし、『白夜』の「僕」もコロムナは特別な場所だといっている。

ペテルブルクの神話とコロムナにはぬきさしならぬ関係がありそうだ。

ここではまずプーシキンの「ペテルブルク物語」から紐解いて神話の普遍性をゴーゴリの「ペテルブルク小説（もの）」と、四〇年代ドストエフスキーの夢想家の物語で検証し、モダン・クラシックの前史を形成した文学の特徴を考察していく。